

米澤工業會誌



朝日を浴びた餐霞館遺跡の鷹山公像

私は現在の米沢市を形成した恩人が3名居ると思っている。その一人が前号の直江兼続公で、二人目が上杉鷹山公である。彼は九州高鍋藩主の次男で、上杉とは血縁関係にあり、江戸藩邸で生まれた。当時の上杉藩は財政が厳しく、藩を返上しようとしていた。9歳の時養嗣子となり、16歳で家督を継ぎ、諸改革に当たる。自ら範を示し、反対勢力を抑え彼の死後直ぐに藩は財政を復活し藩士・藩民共に生の喜びを得る。学んだ師や書物や事例は多数あれど、高鍋藩傳役三好善太夫、細井平洲、儒教、上杉謙信、武田信玄、直江兼続等である。「受け継ぎて国の司の身とならば 忘るまじきは民の父母」35歳で隠居し餐霞館に住み「為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人のなさぬなりけり」と詠んだ。さらに次の藩主治広公に残した「伝国の辞」はその後歴代の藩主が教訓として仰ぎ、藩政に当たっている。米沢高等工業学校・学問の町、織物・物づくりの町、さらに人への信頼感は公の賜物である。